よく死ぬことはよく生きること　生より尊いものはない（最終回）
大往生

吉永　馨

「一人の命は地球よりも重い」と言われています。しかし、全く知らない人が死んでも、それが大災害や戦乱や飢饉などによる大量死ででもなければ、私たちは無関心です。自分の死（一人称の死）は重大です。これこそ地球より重い問題です。また、親子、夫婦、恋人など、自分と密接な関係の人の死（二人称の死）も重大問題です。ここでは一人称や二人称の死を考えて見ます。

死は縁起が悪い。縁起でもないことは考えない、死を語るのはタブーだ、という風潮が見られます。しかし一方、「メメント　モリ（死を忘れるな）」といって死を常に意識せよという格言もあります。仏教でもキリスト教でも死を意識して生きることを正しいとしています。私たちは勿論この立場に立っています。

死は避けられないものならば、いまある短い生を大事にしなければなりません。死は生のように持続するものではなく、生の終わりの一瞬です。そこを堺にして霊魂の世界に移る一瞬です。霊の世界がいかなるものか、誰も知りません。各人、それぞれの思いに任せるほかはありません。

死の瞬間に至る過程は様々です。ガンなどで死ぬ場合は激しい疼痛に苛なまれることもあります。ガンでも、痛みがないものもありますので、すべて苦しいわけではありません。特に８０歳以上の高齢者では、ガンの進行も遅く、苦痛も余りありません。激痛がある場合も、麻薬などの適切な治療で抑えることができます。ガン死も健康者が想像するほど苦しいものではありません。高齢になって自然死する場合は、死は全く平穏です。

立派な死を大往生といいます。往生と言うのは仏教語で、浄土宗などが説く浄土（極楽）に往って生きることですが、一般化して立派な死を言うようになりました。大往生という時、死の瞬間を指しているのではありません。苦しまずに死んでも、それだけでは大往生とは言いません。その人が立派に人生を完成して生を終えた場合に言います。つまり、大往生は、その人の全人生が活力に満ち、世に貢献し、人々の尊敬を受けて完結した場合に用います。

マザーテレサはインドのカルカッタで貧民のために働き、行き倒れを集めて看取り、ノーベル平和賞を受け、８７歳の天寿を全うしました。彼女の創立になる修道女会はその後も活動を続け、世界各地に支部が設けられています。南アフリカの支部では、エーズや結核の患者を見ています。１００以上の支部が世界各地にあるということです。

ダミアン神父の話はこうです。１８００年代、ハワイに西欧人が侵入し、現地の王政は消滅しました。彼らが持ち込んだハンセン病が住民に拡がり、患者をモロカイ島の収容所に集めました。収容所の環境は劣悪でした。ダミアン神父はこの窮状を見てモロアイ島に移住し、彼らのため働きました。頑健な彼は土方のような労働もしました。こうして１１年後、ハンセン病は彼にも伝染し、発病しました。発病しても彼は奉仕を続けました。むしれ彼は、発病を知った時、「ああ、これで私もこの人たちと同じになった」と感謝したということです。発病して５年後、働き続けた彼はこの病気で死亡します。そのとき彼は４９歳です。彼もまたよく生きてよく死んだと言うべきでしょう。

よく死ぬこことよく生きることは殆ど同意義のようです。よく死にたいものですね。